
虹 ~紡ぐ想い~

ひまねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹 ～紡ぐ想い～

【コード】

N6553Y

【作者名】

ひまねこ

【あらすじ】

出会いと別れ。喜びと悲しみ。その中で、鮮やかな虹が輝く。別れの季節に向かって歩く、少年たちの心を描いた物語。

(前書き)

この小説は、合唱曲としてよく歌われる「虹」を基にした、想像世界です。

短時間で書き上げた作品なので、分かりにくい部分も多いと思いますが、楽しんでもらえたら光栄です*

今日は朝から雨が降っていた。

6時間目は自習らしく、学年主任から進路希望の用紙が配られた。

「高校の進路は大事だからな、しっかり書くように！」

「えーっ、前も書いたじゃないですかあ」

先生の言葉に一人が反応する。確かに、この前にも同じような事を書いた気がする。

「憂鬱だな。」

雨のせいか、進路のせいか、ついそんな言葉がポロツとこぼれた。

慌てて口を抑えて先生の方を見たが、どうやら気づいていないようだった。

ほっと胸を撫で下ろすと、隣から声がかかった。

「辛気臭いなあ。」

「そんなしみじみ言わないでくれよ……」

決まりごとを書くように、スラスラとシャーペンを走らせながら答える。

3年のこの時期は、だいたい皆進路が決まってくるから、悩んでる生徒なんてそういない。

そんな中、用紙も書かずに話しかけてくる隣のやつが一名。

「要は考え方だと思っんですよ。」

「？ なにが？」

シャーペンを置いて顔を上げると目があった。するとニツと笑ってそいつは言った。

「全部さ。雨だって、高校だって、未来だって！」

「……わけわからん。」

かったるそうに言う俺に、そいつは少しつまらなそうな顔をして一言付け加えた。

「じゃあ、雨があがったら上、見てみなよ。」

「上？」

その言葉につられるように上を向くと・・・先生が目の前に立っていた。

「おい！うるさいぞっ！！」

「はぁーい。」

慌ててシャーペンを走らせ始める。隣でクツと笑い声が聞こえた。

「今じゃないのに。」

なんだか恥ずかしくて、ふんつとそっぽを向いてやった。

下校時間、まだ雨はざあざあ振りだ。

下駄箱の靴を見て、ため息をついた。まだ買って新しいのに、今日一日で汚れてしまった。

帰ったら洗わないと、とテンションが更に落ち込む。

すると、トントンと肩を叩かれた。

振り向くと、ふにつと頬になにかが当たる。人差し指だ。

「やあい、ひつかかったあゝ」

「おまえっ！！！」

顔に血が上るのが自分でも分かる。本気で掴みかかってやるうかと思った。

「まあ落ち着けて。さっきみたいに辛気臭い顔してるからさ。なに、靴が汚れたのへこんでんの？ あははっ、女子かよ！」

「うっせ。お前に俺の美的センスは理解できぬわ。」

「美的センスって、お前美術の才能、無に等しいじゃんけ・・・」

「馬鹿にしとるんか。」

ぶっすーと睨むと、そいつは笑いながらさっさと靴を履き替えて出ていこうとする。

「おいっ、逃げんなーっ」

慌てて後を追うと、そいつは少し寂しそうな顔で振り返った。

「一緒に帰らんか。」

「あ、あぁ・・・」

傘をさし、ゆっくり歩きだす。

さっきとは違って変わった無言の雰囲気、なんだか居たたまれなくなってくる。

なにか傷つけるようなこと言っただろうか？

「……。」

「……。」

走って帰りたいと本気で思ったその時、

「……………するんだ。」

「え？」

振り返る。傘で顔が見えない。

「俺、みんなより早くこの学校卒業するんだ。」

「！？ なに言ってるの。義務教育だぞー」

ふざけてると思った。冗談だと。

「違う、違う、そういう意味じゃなくて。つまり、さよならってことさ。」

「……？」

まだ状況を理解していないという顔で尋ねると、そいつはさっきみたいにニツと笑った。

「諸事情ってやつですよ。たぶん明日、先生から居なくなっちゃったことだけ話されると思うよ。」

なんだそれ。頭が真っ白になる。まるで景色が色を無くしたようだった。

それはつまり、なにも教えてくれないってことですか。転校か、留学か、なにも話さずに消えるってことですか。

「この秘密主義者め。」

「ごめん。」

再び歩き始める。さっきよりも早く。走ってないのに、何故か息が上がってきた。

なにをしたいのか自分でもよくわからなくて。また止まって、そいつに向き合ってみた。

なにを言ったらいい。分からない。でもなにか言いたくて、口から出た言葉は。

「どんなところに・・・行くんだ。」

予想外の言葉にそいつも、俺自身も驚いた。なんだそりゃ!と。だけど、そいつは笑って言った。

「そうだな。海の、みえるところかな。」

心の奥が、すっと冷える感覚がした。思わず手を強く握る。

「・・・。寂しくなるな。」

すると、そいつがスツと傘を閉じた。いつの間にか、雨が止んでいたのだ。

そして目の前の坂を一気に上り始める。俺も慌てて後を追う。

「おいっ!! なんなんだよっ」

その言葉に、上りきったところで勢いよく振り返りそいつは言った。

「今度はちゃんと雨上がったぞ!」

そして、目の前の空を指差す。

「! 虹だ・・・」

そう、生まれてから何度も見たことがある普通の虹だ。

・・・違う。

なんだこの虹。こんな綺麗なの見たことない。

その大きな虹を食い入るように見つめた俺に、声がかかる。

「要は考え方だと思うんだよ。 雨だって、高校だって、未来だって。」

そいつがふふんと笑ったように感じた。

「別れるのは俺だって寂しいし、辛い。だけど、必ず出会った分だけ別れてあるものなんだよ。今分かれなくなたって、あと少ししたら学校の皆、別々の道へ進むんだ。さつき・・・何も考えずに書いてた進路希望用紙、あの紙に一つの高校名を書いた時に俺たちは、別れに向って進んでる。」

ハツとした。そんなこと全然考えてなかった。

驚いた俺の顔を見て、そいつはまた口を開く。

「でもさあ、別れるってことはさ。その後、必ずまた出会いがあるってことなんだと思うんだわ。高校でのまだ見ぬ友達とか、同窓会とか。結局、別れるってことは出会ったってことでもあり、出会ったってことは別れがあるってことなんだよな・・・表裏一体ってまさにこのことだな。」

目が合う。虹が消える。笑みがこぼれる。

「そうだな。確かに表裏一体だ。じゃあ俺は、今の悲しい悲しい気持ち、次また絶対にどこかで会える喜びと呼ぼうか。」

真似して、ニツと笑ってみせる。そしたらそいつは、少し驚いた顔になった。

「うまいこというじゃんか。確かに、出会いの喜びがあるってことは、別れの悲しみもあるもんな。」

「それは言うなよ。」
再び笑い声が重なる。

そして、隣の影がゆっくりと動く。新しい出会いに向って、未来に向って。

立ち止まってたって、地球は止まっちゃくれない。

どうせ明日が来るなら、歩き続けるのが一番だ。俺は大声で言うてやった。

「またな！」

俺の隣にいた影はもうだいぶ小さくなってしまっていたけど、ピンツと立てた親指は遠くからもしつかり見えた。

家に帰り、靴を脱ぎ捨てる。母がその汚い靴を見て眉をしかめた。

「まだ新しいんだから、ちゃんと洗いなさいよ。」

「いや、洗わないよ。まだそんなに汚れてない。」

「ちよっと・・・」

だって、もったいないじゃないか。その泥一つにだって思い出が詰まってる。

そしてこれからも・・・。

俺たちは、今という時を未来に向って歩き続ける旅人だ。

(後書き)

最後まで読んでくださり、ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6553y/>

虹 ~ 紡ぐ想い ~

2011年11月20日09時29分発行